

第 12 回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

1 日時 平成 17 年 12 月 4 日（日）午前 9 時 00 分～午後 0 時 00 分

2 場所 南箕輪村民センター 2 階 大会議室

3 出席委員

池上 昭雄委員長	熊谷 秀男委員
笠原 伸二副委員長	丸茂 貴子委員
小坂 樫男委員	小池 博委員
岡庭 一雄委員	関 哲夫委員
小林 辰興委員	北原 秀樹委員
小口 武男委員	藤本 功委員
北原 曜委員	

4 開会

（野村主幹教育支援主事）

皆さまおはようございます。

本日は、ご多忙の中また、休日にも関わらずご参集いただきありがとうございます。

それでは、委員長よろしく願いいたします。

（池上委員長）

おはようございます。

それでは、第 12 回高等学校改革プラン推進委員会を開会いたします。まずはじめに事務局から、資料説明と他地区の審議状況について、ご説明願いたいと思います。

（野村主幹教育支援主事）

資料説明の前に、ほかの審議會の様子をまずお伝えしたいと思います。

第 1 通学区から申し上げますけれども、第 12 回の推進委員会を 11 月 28 日月曜日に、午前中に行われました。内容的には、第 1 区について、将来的に 1 から 2 校になるよう、段階的に統合する方向性が確認され、当面は飯山市内の普通科 2 校または 3 校を統合し、2 校の校舎を利用する意見が出されました。

中野高校と中野実業高校を統合し、総合学科を設置することが再度確認され、地域から出された提案に対する意見が、また出されました。中条高校の現在の状況を考えると、このまま設置しておくことは難しいことから、統合を前向きに考えるという意見や、分校などで校舎を残すという意見が出されました。以上が第 1 通学区の推進委員会の様子であります。

第 2 通学区推進委員会ではありますが、第 12 回が 11 月 27 日（日曜日）午後に行われました。審議からの提案の中で、多部制・単位制にかかわる提案があった、2 団体からの説明を聞き、審議の大半を参考にした。望月高校を多部制・単位制に転換すると、いう地域からの提案について、地域プラットフォームの活用などに関心が示された。

一方、近隣の蓼科高校と共存していくことへの不安の声も多く出された。また望月高校

と蓼科高校を統合して、新たな学校をつくることも提案され、賛成意見も出されたが、引き続き検討していくこととした。以上が第2通学区推進委員会でございます。

第4通学区推進委員会でございますが、第12回が11月20(日曜日)の午前中に行われました。第12区の個別論議2回目になりますが、それを行いました。まず委員長作成の資料、第4通学区で学級数推移と総数決定基準の関係などを基に、学校数を4校から3校にする大北地域の再編について、審議されました。

将来的には生徒数の減少が見込まれることから、ある程度の規模を確保するためには、現在の4校を3校にせざるを得ないとのなどの、賛成意見が多く出されたが、南安曇、北安曇で線を引いて考えることが、はたして適切であるのかどうかを精査していく必要があると言った慎重論もあり、次回以降引き続き審議することになりました。

白馬高校の将来像について、その魅力づくりを含めて、さまざまな角度から審議したり、次回も引き続き審議し、議論を深めることとなりました。これが第4通学区推進委員会の様子でございます。

続きまして、12月1日に開催されました諏訪地区、諏訪地区高等学校PTA連合会の高校改革プラン学習会についてご報告いたします。諏訪地区高等学校PTA連合会、高校改革プラン学習会は、12月1日の午後6時45分から午後8時40分ぐらいまで行われました。PTAの連合会の学習会ではありますが、各校の同窓会の方々も大勢参加されておりました。参加者は120名ほどだと思います。

推進委員の中では丸茂推進委員、藤本推進委員のお二方もお出席でした。県事務局からは4名参加いたしました。最初に事務局から説明に45分程行い、その後、質疑応答がなされました。その中では、校名が上がったことで、中学生に与える影響についての懸念が表明されました。もっと時間をかけて学校、また学校関係者の意見を聞いて欲しいという声もありました。高校改革については平成15年から新聞記事で読んだ記憶があるが、時間をかけて欲しいという声もありました。生徒数のピーク時を100と見るのではなく、平成17年を100と見て欲しいという考え方も等々出されました。また推進委員の方の中からは、少子化により学級減だけでは学校規模が小さくなり、クラブ活動もままならないこと。またこれを機会に、諏訪地区でも高校改革を考えて欲しいとの発言がございました。これが12月1日の短いですが概要でございます。

以下高校教育課野村主幹教育支援主事より資料説明 【説明内容省略】

5 議事

(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは今までのところで、ご質問やご意見ございますか。

(岡庭委員)

委員長、吉江課長にお聞きしたいのですが。昨日(12月3日)の信濃毎日新聞の記事によりますと、県教育委員会が開かれまして、吉江課長が、この高校改革についての日程の問題等についての発言が、載っとるわけでございます。発言内容そのものが、なかなか微

妙な形で、どちらでもとれるような発言なんです、ひとつの記事の中が正しいか正しくないかは、これ私も見てない、現場にいなかったので分かりませんので。記事の内容からいうと、再案がまとまったところから、やっていただければいいんじゃないかというような文に取れるお話。まとまらなければ、もう少し向こうへ行ってもしょうがないんじゃないかと。それぐらいの発言と同時に、1 月いっぱいには結論を出したいんだという、そういうお話ですが、その辺の課長の発言の真意を、具体的にわかりやすく、ご報告いただきたいと思います。

（吉江高校教育課長）

岡庭委員さんから、そのようなご質問を頂戴いたしましたので若干述べさせていただきますと思います。

12 月の 2 日の午前 11 時から、教育委員会の定例会が開催されました。長野県教育委員会でございますが、その席上で私のほうから各推進委員会、4 つの推進委員会の経過等をご報告をいたしまして、その上で申し上げた点につき、若干の報道があった次第でございます。

それで、その定例会の中で、まず私が申し上げましたのが、各推進委員会で非常にご熱心な議論をいただき、また委員会の中には、12 月に 3 回実施したいというような委員会もあり、非常に精力的にいただいているので、私どもは従来から申し上げておりますように、基本的には 12 月末、そうはいいまして、あるいは 1 月の中旬までということで、トータル 14 回に加えてプラスあと 2、3 回を、議論していただくような可能性もあるんで、ぜひなんとか、報告をそれぞれからいただきたいと、またそれを期待しているということ、をまずは、申し上げた次第でございます。

それでただ、地区によりまして、いわゆる情勢等を考えた場合に、報告等がなかなか困難な場合に、策定ということが厳しくなりまして、切り離される可能性があり得ると、というようなお話を申し上げましたが、ただ、その前提で申し上げたことといたしますと、それに応じましての懸念する事項といたしまして、統合する学校とか、あるいは統合うんぬんという議論がない学校も含めまして、今 1 番大きなこれからの問題になってきますのが、基本的に実施計画というのが、もしそういうような状況になってきますと、それぞれの第 1 通学区から第 4 通学区まで加えて、全体の議論になって参ります。

そうなった場合には、その通学区における現在の学校の施設等の状況、あるいはそれぞれの学校における教育内容等というようなものに、私どもは少しでも早く手をつけたい。今現在のそれぞれどの学校ということに限らず、指定設備等をやらなければいけないような学校が、多々ございますが、それぞれの学校が自主計画を策定しない限り、どういう形でその通学区が、なってくるかがわからないということの中で、万が一そういうような状態になれば、取り残されてしまう可能性が、あるのではないかというようなことを、非常に危惧していると、いうことを申し上げた次第であります。

それで危惧しているんで、ぜひ各推進委員会におきましては、先ほど申し上げたような日程調整をいただきまして、ぜひとも継続して議論いただいて、なんとか当初の予定とおり、おまとめいただきたいということを、申し上げたという次第でございます。そんなことでございます。

(岡庭委員)

はっきりしてもらわなくちゃならないのは、県教育委員会が19年度実施ということですね。要するにたたき台そのものを19年実施ということですから。それにせかされて、かなり皆さんがいろいろ苦労しながら、時間をかけながら、やっとするわけです。19年度実施ということは、いわゆる県教育委員会のたたき台を中心にしたことが、19年度実施ということについては、これは不動のものなのか、流動的なものなのかということ、現時点において課長が考えることなのかということについてお聞きしたい。

(吉江高校教育課長)

それにつきましては、ほかの委員会でも19年度からの実施ということ自体に対して、懸念されるようなご質問、あるいはご要請等も頂戴した経過がございます。

ただ、私どもといたしますと、現時点において、とりあえずのことで申し上げますと、5月の29日にそれぞれの委員さん方にお示した日程自体が、その当時も、私申し上げましたように、12月を目途といたしつつ、来年1月というような言い方もした経過がありますので、それまでにご報告をいただいて、19年度から実施して参りたいというようなことを、申し上げた経過がございますので、現時点においてそれが変わっているものではないということ、現時点においては申し上げたいと思っております。

(池上委員長)

よろしゅうございますか。

(岡庭委員)

わかっているんですけどね。大体は。

(藤本委員)

諏訪の話でもちょっと出たのですが、長野日報の4日、5日前の記事を見て僕は驚いたんですけど、例の葉養委員長ですが、高校改革プラン検討委員会の委員長が、こんなに急いで議論されているとは驚きだと。2年、3年かけて議論すべきことを、今年中になんていうのは、もう、まさに驚きだ、私は2年、3年かけてじっくり議論すべきだ、こんなに急ぐ理由は、もう財政以外にないということを葉養委員長自身が言われていて、私はそれを見たときに非常に驚いたわけです。諏訪の学習会でも同窓会の方が発言されておられたけれども、そのときに課長さんが何か説明されていたようですが、ちょっとよくわからなかったもので、それについて情報とか、説明があったら、吉江課長さんをお願いしたいのです。

私も、葉養委員さんが、「えっ、そこまで考えられたのか」、「えっ」と思い、もっともだという認識でおりましたので。

(吉江高校教育課長)

今、藤本委員さんからお話ございまして、それで実は先ほど報告の中にございましたように、12月1日に諏訪実業高校で行われた折りにも、そのようなご発言があって、若干触れさせていただいたわけなんです。

私どもとしますと、葉養委員長自体が現時点において、現状の動きというようなものを十分承知された上で、ご発言されたとは思えませんので、また11月の確か29日に、ああいうような会合が、ある県議会の会派の中で執り行われたということは聞いておりましたが、私どもが同席わけでもございません。その席上というのは、ですから、私どもにいたしますと、まあ、たまたま2社が取り上げられたようですけれども、その報道によってということなものですから…。

その辺を、実際問題とすると、委員長に問い合わせをした経過がございます。それで委員長に問い合わせをした経過の中では、委員長は、現在はいわゆる検討委員会が終わってから、推進委員会の動きを逐一見ているわけではなくて、現在は実際問題とすれば、蚊帳の外から見ているような状況だということで、お話ししたものについて、一面的に取り上げられてしまったというお話を頂戴いたしました。

それで最初にお話しした基本的な考え方については、むしろ触れられずにですね、後段におきまして、委員からの声に対して、一般論として可能性がある部分について行われ、お話ししたこと自体を、強調されているという感があると、というような話をお聞きしてまして、それで委員長とすれば、基本的に4つの推進委員会がご苦労いただいて、それぞれ決めてきていただいていることについて、白紙に戻すことはむちゃだとか、あるいは、12回もの会が開催されて、具体的な固有名詞が上がっているということは、それぞれの地域の方々のご苦労が非常に、ご苦労が実を結んできたひとつの表れだと思うんで、それは尊重したいということ、基本的な線としてお話をしたようです。

ただ、例えばの話が、よその県の状況とか、そういうようなもののご紹介の中で、ひとつの例として述べられたこと、それが多くは取り上げられたという感があると、というような話を承っておりまして、それを先日の若干説明不足ではあったかもしれませんが、ご説明した次第でございます。

（池上委員長）

ありがとうございました。よろしゅうございますか。それでは、今の議論はわれわれもしっかり努力をして、その去就の受け違いがあるかもしれませんが、従来の議論に戻して、今回の議論に基づきまして、9区の状況につきましてご説明をお願いいたします。

（岡庭委員）

前回ちょっと私のほうでお話をしたまま会議が、ちょっと中座させていただきましたが、今の方法論につきましては、熊谷、川島両委員からもお聞きしておりまして、それらを踏まえまして、われわれは南信州広域連合が主催いたします「南信州の高等学校未来検討委員会」これを開催していただいて、そして本日お約束でということでございましたので、話を詰めさせていただきました。

結果から申し上げますと、飯田長姫高校と飯田工業高校が統合して、1校削減することによってございまして、この統合の高校その他については、これは以降まだ議論の余地がありますが、1校削減ということについては、当推進委員会の結論に対して、急がせていただいたということです。

それからもう1点、多部制・単位制高校について、話題を要望しとったわけございま

すが、多部制・単位制高校を箕輪工業高校にするということになりますと、定時制高校が残ります。飯田工業と飯田長姫高校には定時制がございまして、飯田下伊那の教育界の要望としましては、夜間定時制だけじゃなしに、昼間の定時制も欲しいという要望がございましたので、これはわれわれ委員の考えといたしまして、統合した学校に昼間部の定時制を、増設いただきたいということでございます。そのことについてご要望したいと、一般のいうことでございまして、これが結論でございます。

私もこの結論を出すに当たって、私の個人的な意見を述べるというのも躊躇されるところであります。私も述べなくちゃならないと思っています。これは実は、11月23日のあの会合を踏まえまして、飯田長姫高校の同窓会の会長さんが傍聴されまして、これは大変なことになってしまう。このままいってしまうと飯田下伊那、南信州の飯田下伊那地域に、実業高校を残したいというわれわれの要求が飛んでしまうんじゃないかと、総合学科に意見がまとまらなかった場合は、県教育委員会のたたき台の方向で19年度実施という形で強行されてしまうのではないかと。そういうことだったら何としても、「名を捨てて実を取る」という、そういう決断の中で飯田長姫高校というものがなくなっても、実業学科を残したいという決断で、方向性が出されたわけでございます。

これは本当にぎりぎりのところでの、やっぱり苦渋の選択だったと、思っているわけでございます。本来ならやっぱりもう少しわれわれとしては、南信州地域の子どもたちの教育をどうするのか、高等学校教育をどうするのか。緑ヶ丘中学校のPTAの皆さんからお話もありましたが、もう少し進学校の幅が飯田の中心部に欲しいという要望も、飯田高校と飯田風越高校のほかに欲しいという要望も、かなり潜在的にあるということがあったわけでございます。そういうことを踏まえて、その総合学科の問題、全体を踏まえながらももう少し議論をしたいというのを、もう少しあったわけでございますが、そういう形で結論を急がざるを得なかったということについて、本当に教育100年の大計という問題が、こういう様なところでやっぱり決められていいのかどうか。それだけの理由というのは、われわれは責任を負えるものを持っているのかどうかということだけ考えると、本当に背筋が寒くなる思いで、この委員会に私は今日話をしなくちゃならない。ぜひこれは、私は記録にとどめておいていただきたいと思いますと思っておるわけです。

本当に子どもたちが、われわれの議論を見て、そして本当に自分たちの将来のことを、これほど親、大人達が、真剣に時間をかけて検討していただけたという感動を、与えられるようなそういう時間と、やっぱり議論はされているのかということから考えると、私は不十分だということを、申し上げさせていただきたいと思っており、これはもう3人の委員の見解でもないわけでございますが、私の個人的な見解として記録にとどめていただければいいということです。よろしく。

(池上委員長)

まあ前回の諏訪に続きまして、まさに、まさに苦渋の選択ということでご説明をいただきました。大変な重要な考えでございますので、今のご説明につきまして、まあこれはご提案と受け取らせていただいて、ご質問がございましたら、受けさせていただきます。いかがでございましょう。

それでは、私から少し伺わせていただきたいのですが、いまのようなお話の中でも、こ

れから議論するんですが、例の総合学科のご提案でございますが、これについてのご見解はいかがでございましょうか。岡庭委員。

（岡庭委員）

総合学科の問題につきましては、実はこれはもう総合学科の問題以前に、何で教育委員会は、今度の高校改革の中で、実業高校をほとんど名指して来たわけで、そうするといわゆる職業学科、専門学科を、長野県教育委員会はどう考えているのかってことが、明確でないわけです。ですから、もうみんな焦ってなんとかまとめたいた。

総合学科では、専門学科が、おとといの委員会の委員の説明を聞きますと、例えば農業科の専門学科を残したとしても、普通科と統合した場合は、農業科はだんだん衰退していった、普通科に移行していつてしまつて、専門学科が残らないと。だから、専門学科だけ残すべきだという考えになってあるわけですし。実はこのところはやっぱり、専門学科はどのように長野県教育委員会は考えているのかと。

聞くとところによると、工業、農業等の実業系の高校は、3通学科、3通学区にひとつずつの専門学校を残すということで、後は要するに、瞬時普通科にしていくというような考え方、総合学科にしていくという考え方で。まあ確かにもうこれは下伊那農業高校と飯田長姫高校を、農業科の実業科を総合学科にしていくということで、これは専門科をなくすということですね。県教委の、要するになくすという姿勢だと。混在とどのように、非常に深い関わり、関連があるわけございまして、総合学科うんぬんという議論よりも、子どもたちのやっぱりキャリア教育というか専門学科を、どういうふうに県教委は今後考えていくのかというところが、はっきり示されていないと思います。

要するに、それは県教委はあるかもしれませんが、県民は知らせていない。それから現場の教師にもたぶん知らされていない。それはもう、かつて県立高校の校長をやった方が、私どもの検討委員会に委員にいらっしゃるわけございまして、その方が、執拗に総合学科に対するデメリットの様子についてが、強調されましてそのことを非常に私どもの検討委員会を、リードしたという事実もあるわけございしますから、もうこれはそのことをどうするのかという議論があつて、総合学科という議論ではないかと私は思っております。総合学科という問題は、第2の段階でやっぱり考えたわけじゃない。今回の場合無理してこの通学区に総合学科の導入という議論にはならないのではと思っています。

検討委員会とすれば、総合学科という意見も、川島委員からも、またわれわれに提示をしましたので、次の検討委員会、もう1回ありますので、総合学科の問題というのは、どういう形で議論にするのかとなるわけで。まあまず第1はやっぱり、その専門学科をどういうふうに県教委は、考えているのかということを、明確にさせていただかなくちゃあ、総合学科の議論に続けていけないと思っているわけです。

（池上委員長）

今のお話のところで、そうしますと次の委員会を受けて、3委員からまた違うご意見も承るということですか。

(岡庭委員)

その可能性については、ちょっとお約束できない。

(池上委員長)

それはいつでございますか。一応。

(岡庭委員)

私どもは、16日の日にもう一度最終の検討委員会を計画いたしております。

(池上委員長)

わかりました。今の、私自身も少しその専門学科ということについて、意見を持っておりますが、まず、県の体制について、ご発表ください。

(柳澤教育主幹)

はい、専門高校につきましては、高校改革プランの検討委員会でも、昨年論議をしていただきまして、ことし3月に出した最終報告書の中に、専門高校についての「キャリアを拓く専門高校のビジョン」ということで、今後の専門高校のあり方について、7点ほどにわたっての提言が出されております。

この最終報告書では、どこの地区にどういう学校を残すというところまでは、記載してないわけですが、それぞれの通学区に、地域からのニーズあるいは産業社会の動向に注目して、学科改編等しながら、再編を進めるというような表現になっておりますが、それぞれの通学区の中に農・工・商それぞれの学びの選択肢が得られるような、そういうようなことも考慮しながら候補案を、考えてきたということでございます。

なお総合学科につきましては、デメリットの点が強調されたというお話がございましたが、これまでの推進委員会の中でも総合学科については、さまざまな資料も提出いたしましたし、様々な議論を展開もしてきていただいておりますが、当然メリット、デメリットあるかと思いますが、塩尻志学館の例をご覧くださいますとわかりますとおり、長野県においては総合学科の導入というのは、成功したのではないかとということで、それぞれの地域に1校ずつつくる総合学科につきましても、どこの地域にどういう総合学科をつくるかというのは、転換するその学校の持っている特色とか、特徴とかそういうものを生かして、あるいは地域の特色を生かした総合学科と、いうものをつくっていくと、必ず成功するというふうに確信をしているわけであります。

なお専門性が薄れるという点につきましても、例えば第二推進委員会では、ある委員さんが他県に視察に行かれた、その視察報告の中で、「自分は専門性が薄れるかというふうなことを思っていたけれども、そういう所を視察をした結果、決して専門性が薄れるということはない。進学にも就職にも対応できる。そういうことがわかったと。」このような、ご発言もありましたが、さまざま工夫をして、よりよい総合学科をつくっていけば、今後の生徒のニーズに対応できるようなものが、つくっていけるのではないかと私どもは思っています。

(岡庭委員)

これは私に言わせてみれば、まったく答えにならないのです。現実、下伊那農業高校と長姫高校の実業を廃止し総合学科にしたという県教育委員会の、いわゆる職業教育に対する考え方は、どこにあるのかということをお聞きしているんで。検討委員会報告書は見たら読めばわかるんで、その検討報告書を受けて、たたき台として出したわけですから、県教育委員会は。その中で、駒ヶ根工業高校を別に削減するといって出したわけですから。

長野県のやっぱり産業教育というのをどういうふうに、県の教育委員会はやろうと思っているのか、考えているのか、そしてたたき台はつくっているのかというところを、やっぱり明確に示して、総合学科の問題でそりゃ専門科と、塩尻志学館高校といいますが、あれは農業科というのはどうなるのかということから考えれば、進学コースでは大変大成功する。この間、教研集会で松本のお母さんが言いました。塩尻志学館高校非常に父兄の中で評判がいいと、塩尻志学館高校に子どもを出したいという人が、たくさんおりますよというお話があったんです。しかしここをどのように県教委は考えるのかというと、具体的なことで今日あたり、いっていただかないと、われわれとしては判断がしにくいということです。

(池上委員長)

重ねてどうぞ。

(吉江高校教育課長)

今、ちょっと例が出されましたが、例えば赤穂高校と駒ヶ根工業というような案もお出ししております。それでその中では、両校の良い点をというようなことを、記載させていただきまして、それで場合によりますと、若干私どもの意図と地元のご理解が、違っていた面があるかと思いますが、私どもは基本的に、例えばの話が、駒ヶ根で申し上げますと、駒ヶ根の現在の工業科を残す前提ということで、両校の特色を残しながらと、いうことを申し上げた経過があります。ですから単に、工業高校あるいは農業高校につきましても、単科であるという、いわゆる専門高校の必要性が必ずしもあると、いう認識はしておりません。

それともう1点申し上げますと、下伊那農業等につきまして申し上げますと、私どもが描きましたのが、先ほどのお話になるんですが、下農で申し上げますと、過日12月の2日でございますか、2日の未来検討委員会の折りに、私どものほうでご用意した資料の中に、川越総合高校という高校の総合学科のイメージ案を、お持ちした経過がございます。あそこの場合で申し上げますと、農業科の分野を非常に広く入れたものです。それと農業と流通というようなものは、切り離せないということの中で、商業も含めて長姫との連携というようなことも考えた経過がございます。

ですからそういう意味では、私ども基本的に総合学科高校というのがひとつの例とすれば、先ほど岡庭委員さんおっしゃられたように、塩尻志学館はこういうようなものを、特化させるようなお話もございましたが、それぞれの地域のご要望に応える形であれば、当然いろいろなバリエーションがあるという前提で考えています。それでそういうような形で、それぞれの地区における、いわゆる専門性を有する学校の位置づけを考えていくのが、

大前提でございますので、それを考えての上でのたたき台です。

例えばの話が、北信のほうで総合学科高校を考えた折りに、対象にいたしました専門高校は、ある意味では工業系でございますが、そこに対しては、例えば地元のほうでは非常に先進的な農業を、実施している所でございますので、農業系も系列としては入れるようなことも含めて、今後設置にあたっては地元との調整もしたいと、というようなことも申し上げた経過もございますので、そんなことでご理解いただきたい。

（池上委員長）

この件については、かなり議論が深化しないといけない問題だと私は思っています。

県としては最終報告書、総合学科については、各区1校以上という表現をされておりまして、今の話のように、候補については、まだ具体的にその件が上ってこない。これはかなり意見が背離をいたしております。ここは詰めておいて、将来どういう高校に例えば持っていくかということについて、それは16日に、もしまとまらないにしても、どちらの方向に行くかということは議論して置かないと、将来にかかわりますので、ただ時間軸的に見ますと、県とすればここでお金をここでどうかしようと、こういうまあ危惧されますので、そこをどうするかという問題に相成ることです。

ただ危惧しておりますのは、地理的な位置で考えまして、塩尻にあって、次に近隣というよりは、下伊那地域あたりはひとつの候補ではないかというふうに、これはまあ客観的には思うわけでございますし、時間軸もございますので。まあそのあたりを含めて、やっぱり議論しておいたほうがいいんじゃないかと、こういうことです。

（藤本委員）

ちょっと、1分、2分だけ時間をいただければ、総合学科の議論になったので、県教委の方はこういう資料を読まれているでしょうか。

厚生労働科学研究補助金を得た、政策科学推進研究事業として、「若年者の就業行動・意識と少子高齢化社会の関連に関する実証研究」という厚い冊子が本年度3月に出ております。研究されているのは東京大学の佐藤先生ですが、日本中の研究者が研究されて、これだけの厚い冊子を出されているわけです。次回、これのコピーをお渡しします。

その中で、本田由紀さんという東京大学の大学院の先生が、こういうことを述べられております。県教委はまず読まれましたか？

もうちょっと勉強しておいてもらいたいです。この中で本田由紀さんは何を言われているかというと、若者の就業行動、意識について、膨大は総合学科、普通科、職業科の生徒を対象に研究されて、ことしの4月、5月に出されたんですけど、その中で本田由紀さんはこういうことを述べられています。従来の学力に加わえて、対人能力というのが非常に今後は重要だと。対人能力というのは今後生徒達にとって、今ニートとかいろいろありますけども、社会、企業に出て1番重要な第2の能力であると。学力以上にこの能力、対人能力が重要である。対人能力の定義はここで。対人能力というのはどうしたら身につくか結論付けており、その結論のひとつが、職業高校に在籍することだと。

もうひとつ、高校生の進路不安っていうのを分析しています。要するに社会に出て自ら進路を切り開いていく、そういう能力っていうのは、どういう生徒が身につけているのか、

グラフ化してあり、進路不安が大きいのが総合学科、総合学科の生徒、普通科の生徒で、職業科の生徒は進路不安が非常に少ない。対人能力と進路不安は非常に大きな関係があると。この冊子で、本田由紀さんの結論は、実習を通してひとつの専門教育をきちんと行うことによって、進路不安がなく、対人能力が身につくんだと。この対人能力こそ、これからの学力に代わる、第2の能力であってこれがなくしてはならないと。

次回、要点的な所は冊子でお配りしますが、かつて吉江課長は高校改革プラン検討委員会で、何が不足していたかとの問に、それは教育論だと吉江課長はいわれましたけど、岡庭委員さんも教育論が不足していたとおっしゃっているんです。

総合学科の本質がこれで、総合学科でなくて職業高校の大事さが、これだけ求められている。何もこれは偏った話じゃないですよ。だからやっぱりもう1度本当の教育論に戻り、職業高校と専門科、専門高校っていうのを、もうちょっと議論してみる必要がある。

特に今回、下伊那の場合は、あまりにも重装備型の、地域密着の職業高校2つをつぶしての総合学科です。地域の皆さんがやはり専門高校、職業高校の専門性を必要としている、卒業生を必要としている、地域が必要としているっていうんでしたら、もうちょっと別の総合学科というのを検討してみるに値する、なにも専門高校をつぶしてということではないと、私は思いますので、もうちょっと、そこらへんを含めて検討していただきたいと思います。

(池上委員長)

藤本委員、その冊子はどうしますか。

(藤本委員)

コピーして。後で配布したいと思います。

(池上委員長)

わかりました。

その冊子はいつ頃発刊されたものなのですか。

(藤本委員)

4月か5月です。

(池上委員長)

それはあまた、ございますので今の話は、見ておられなくても仕方がないものだと思います。どうぞ。

(吉江高校教育課長)

若干、藤本委員さんの誤解がありますので、1点だけ述べさせて頂きたいと思います。まあ2点ほどになります。

以前、9月の定例県議会の文教委員会におきまして、私が発言したことにつきまして若干の報道がありまして、教育論が抜けているということ、私があたかも認めたような表

現が、ちょっと記事にされたような経過がありますが、それについて申し上げますと、「高校改革プランの最終報告について、どう思うか」というようなご質問が、教育次長と私のほうに投げられまして、そのときに私が申し上げたのが、かねてより若干耳にしておりました教育論の本質が、ないんじゃないかと、というようなお話をおっしゃる方々もおります。しかしながら、私どもが検討委員会にお願いした事項は、特色ある学校づくり、さらには少子化、あるいは通学区の再編にかかわる高等学校の再編整備に関するこの2項につきまして、お願いをした経過があります。そのお願いした内容につきましては、しっかりご報告を頂戴しているということでは、大変ご検討いただいた結果であるというようなことを、お答えした経過でございます。そのお答えした一部分につきまして、切り取られての報道であったということは、ご理解いただきたい。ですから私のほうで、そういう意識を持っているとかいうようなことはちょっと違うという点はお伝えしたいと思います。

それともう1点ですが、総合学科につきまして、実は、今ご指摘いただいたような、お話ございましたけれども、これは厚生労働省の補助金によるようなものでございますので、直接的に文部科学省ルートではちょっと来てなくて、大変申し訳ないんですが、1点申し上げますと、総合学科はある程度の学科を、科目を履修するということから、逆にひとつのクラスよりも、幅広い意味での生徒の交流があると、ということによる評価がございます。それとまたはお存じのように、社会人講師とかいろいろな講師の方からお話を聞けるということの中で、まさしく社会性が養われていいんじゃないかと、というような特色があります。

またさらに申し上げますと、私どもが日頃から目指している、今の少子化に伴う小さい学校というようなものが、どんどん進むというのは、生徒の社会性を育成できないということの中であるというのを、学校の規模というのは大事だということを考えた場合には、ある意味でこの報告で述べられているとおりのことを、私どもの方向性としては動いている、というような理解をしていると思っています。

なお、総合学科高校につきまして申し上げますと、これはだからといって、旧第9通学区うんぬんというわけではなくて、申し上げさせていただきたいんですが、全国では平成6年度から、総合学科というのがスタートいたしました。この資料は、過日あるところでは、私お出しした経過があるんですが、平成6年には7校しか全国でなかったものが、平成16年度末には248校ということで、それこそ数10倍とまあ35倍ぐらいになりましたかね、の急激な増という状況になっております。ですからこれひとつを持ちましても、現在のいわゆる高校生、あるいはもう中学から高校に至る生徒さんに対しての、ひとつの前々から申して上げておりますように、産業社会と人間という科目を1年間履修して、それによりまして、生徒の将来の方向性とかいうことを、改めて自己を見つめて学習していただくというようなことが効果があるというようなことの中で、全国的にこのような数の増に、つながっているのではないかと考えております。

(熊谷委員)

以前にも、お話させてもらったかと思いますが、下伊那で行われました総合学科に関する議論は、総合学科の善し悪しということもありますが、専門学科等を残すことと、総合学科を導入することの意味だと。比較論をしたわけでした。飯田・下伊那の場合、3つの

学校が専門学科の専門校として配置されているわけですね。だから例えば上伊那に行きますと、赤穂高校も箕輪も普通科を併設していますし、志学館の場合におきましても新学科へ、総合学科に変更する前は普通科と農業科でした。併設校でした。

下伊那の場合では、要するに専門学科として3校が配置されていることの重み、このことを重要視するという話をいただきまして、総合学科そのものをまったく否定する議論ではないということでもありますので、ただ、先ほど岡庭さんもいいましたが、次の課題として、総合学科ということになるかもしれませんけれども、少なくとも下伊那の場合、総合学科より専門学科をどうするかという議論がされたと私は認識しておりますので、誤解のないようにお願いしたいと思います。

（池上委員長）

よくわかりました。この議論は、あとの時間がたぶん重要な議題だと思いますが、ちょっと目をほかの件に転じていきたいと思います。

飯田、下伊那から出されたご提案について、今度は具体的に、学校を統合した場合の実むきの運用ですね。いくつかのシミュレーションを考えられますが、例えば定時制については先ほどのご提案でございますから、今の例えば長姫であるとか、または飯田工業でやる、そのほかもろもろの問題があって、要するに学校のレイアウトとして、どのようにこれから、お考えをもっておられるのか、その辺をちょっと教えてください。

（岡庭委員）

どの校舎に、統合するかどうかという議論については、まだはっきりしていませんし、そこまでわれわれが、やるべきかどうかについて、3人の意思がまだ統一していません。ですから私はこの前話したように、1校削減という推進委員会の報告だけで、あとは県教育委員会が、責任を持ってがんばるべきじゃないかというのは、私の考えですが、それはそれとして、これは市町村合併と同じでございます、いわゆる対等合併でございますから、お互いの中で十分話し合いをして報告書を出していくことと、それから学級数が増えてしまうんですね。それと今の長姫高校、飯田工業高校の校舎では、その学級を受け入れることは、非常に難しい問題があるんじゃないかということがございます。

それから飯田長姫高校には、非常に今、姉齒さんの話が、話題になっていますが、建築に非常に、大変精密的な教育機材が、用意されているってことをお聞きしておるわけです。これはもう長野県の中にひとつあるかないかっていうようなのがね、そういうことから考えてまあ校舎の問題どうするかについて、これは当推進委員会が、私は決められてもいいと思っているわけで、これはもうこの方向の中で、県教育委員会が校舎のことや、あるいは将来の問題などを踏まえて、調整していくということではないかと思っております、これはもう両方の同窓会とかPTAとか取り巻く皆さん達のご意見も、たぶんいろいろあるだろうと思っておるわけでございます。

定時制については、統合した学校に、昼間部と夜間部の定時制をつくるのか、あるいは廃止した学校のほうに、昼間部と夜間部の定時制をつくるのかということについても、これについてもまだ結論は出ていないと思っています。そのところは果たして細部まで結論が出るのかということについては、今、飯田工業高校もこの検討委員会の結果を受けまし

て、飯田工業高校の同窓会も、今議論されてきておる。総合工業高校ということになると、商業科があるなら、商業科をどうするのかどうかということ、踏まえながら議論されておりますので、たぶん 16 日までにはなんとかまとめたと思います、まとまらないこともあると思っておるわけでありす。

(池上委員長)

ありがとうございました。ぜひとも、3 人が下伊那の良識だと思っていまして、ぜひその辺は案が出ることを期待しておりました。結構でございます。

(小池委員)

お願いします。23 日ちょっと欠席をしましたので、諏訪の 2 校の名前が出されたことを聞いて、1 委員としての意見でよろしいですね、ということは諏訪の部会でその後、話し合いがなかったわけです。

私個人の意見として考えを述べたいと思います。私は諏訪は子どもが、横ばいで減らないんで、1 校減は必要ないということ、終始この会が始まってから言い通して来ました。

9 月の段階で北原曜先生のほうから、学級減、4 学級の子どもの現数と、それから諏訪も 1 校なくならなければ議論は進まないということで、私は反対をしてきたのですが、1 校減先にありという委員長さんの立場もわかりますけれど、そのようなブロックの方向性といえますか、そういうもので押し切られたと思っています。

論の比較の部分でありますけれども、北原曜先生に言わせますと、諏訪と上伊那との生徒数の関係で、100 人しか変わらないという部分もあります。100 人って 2.5 学級です。流出を考えれば、5 学級という数量を、しっかり見込めるわけです。それと、県が出したたたき台、これはやはり、論拠を持っているなと思っております。

その上に諏訪の 1 校減について我々が決めていいのか、たたき台では諏訪は 1 校を減らす必要はないのになぜ諏訪が 1 校減らされなければいけないのかと認識があるわけです。この間より我々は、学級数の増減で対応できると言ってきたわけで、これがどうなってしまったのか、という状況であります。

私が今、1 番不愉快で仕方がないのは、上伊那の箕輪工業の多部制・単位制の移管。たたき台で出されていた、赤穂と駒ヶ根工業の統合については、一切言及されていない。言い方を変えれば、諏訪の感覚からいえば、諏訪は前提として、子どもが減らないのですから、学校数が減る必要がないのです。それにもかかわらず、諏訪も泣けと。そういう論法の上に、上伊那が駒工、赤穂の統合による 1 減を諏訪でなんとか 1 校を減らせることで処理できる。その上に、俺のところは箕工の多部制・単位制で行く。これでは私は、帰ったときに諏訪の人に説明が付かないです。確かに特色のある高校教育とか、諏訪の高校の全体像をどうするんだというような側面で、岡谷東と岡谷南の二校を考えるのは意味があると思っはいます。そういう側面から考えて、諏訪の南と東のジョイント校統合化と言った案も生ずるはずですが、やはり諏訪の統合・廃止の案は白紙に撤回をし、県のたたき台案、これをやっぱり大事に考えていく。そのことをお願いするのが 1 番いいんじゃないかと思っております。

下伊那の苦渋の選択もわかりながら、この辺のところには非常に引っかかっておりまし

て、納得もできませんし、地域の人に説明もできません。これでいいのかと考えております。ぜひ私が述べましたふうにしていただければありがたいかなと思います。

(小坂委員)

今回それぞれの3地区の1校削減が、一応下伊那でも決着を迎えそうですね。今の小池先生の議論、これは個人的なご意見で、少なくともそれは議論の戻りだと思うんですね。第6回以降、学区、それぞれ1校を削減したらどうかというのは、その全体の推進委員会の中での結論でございます。

先ほど平成17年の人数でやったらどうかと、そういうことでそんなご意見があったわけですので、これでいくと上伊那のほうが、卒業生でいきますと、人数的に多いんですね。諏訪が1,995人、第8区の上伊那が2,030人、上伊那のほうが多いんですね。そうした中で、資料で平成31年、この数字でいきますと、諏訪が1,906人、それから上伊那が1,804人。まあ下伊那はちょっとぐっと下がりました。これで100人しか変わらないという議論は私が申しました。しかも県立高校は上伊那・下伊那は5校ですけれども、諏訪は9校ですね。しかも私立あり、それから松本方面、塩尻方面あるいは県外の山梨へも行っております。それから上伊那からも相当数が諏訪に流れている。こういう実情があるわけですね。

そうした中でやはりそれぞれに、痛み分けをすべきではないか。ということで、この推進委員会としての結論が出た訳です。それに則って、特に下伊那のほうから分科会を、設けていったらどうかというような話が、当初からあったわけですね。それぞれの地域で特色も違うし、あるいはそれぞれの地域的な特色があるから、それぞれの地域で決めたらどうか。ということで、1郡1校削減という了解の下に、それぞれが真剣な討議がなされ、そして、諏訪地区の6人の委員さんが集まって決めていただいた。というふうに私は理解をいたしております。

そうした中でやはり、この私どもの第3通学区はたたき台をどちらかといえば無視した形です。棚上げした形。これは方々で唐突なこの提案については反論があったわけですね。そうした中で、それぞれに痛み分けをしていこうという形の中で、それぞれの郡から出て来たということで、私は大変、諏訪地区の委員の皆さんが、そういう意味でよくやってくれたなあと、いうふうに思っておりますし、あるいはこの下伊那が、飯田、下伊那が1校出て来たということで、本当にそういった面では、第3通学区のこの議論というのは本当に自主的に、なされてきたというふうに、私はむしろ評価をいたしております。

上伊那、もともと2校あったのを1校と、小池先生おっしゃいますけれども、これは全日制を箕輪工業はなくすということですし、私も関係しております上伊那農業高校の独立の定時制。これについても陳情等もあったわけですが、これは少なくとも箕輪工業の多部制・単位制でその良さを救ってもらえるんじゃないかと、ということでそういう痛みもあるわけでございます。

これから論議を進めていけば、必ずあと5年10年には、もう少しやはり削減をしなきゃいけない時期が来るだろう、いうふうに思っております。しかし当面それぞれの地区で1校ずつ仲良く、仲良くといいますが、削減を決められたということは、大変私は、この委員会として意義のあることだと、いうふうに評価しておりますので、議論を元に戻さないようにひとつ、小池先生、その辺は全体の委員会として決めた訳ですから、しかも諏訪の

6 人の委員さんの中で、ということで決めていただいたという、われわれが決めたわけではない。その辺のところもご理解をいただきたい。

(小林委員)

私も別に、上伊那って同じですかってということじゃなくて、あくまでも推進委員全体の立場で、考えていかなくちゃいけないのかなあと思うんですが、やはりいままでの積み重ねを、大事にしておかないと、この会をやってきた意味がないと思います。

いろいろ難しいことがあるということは、私も十分承知していますし、大変だってことはもう十分承知していますが、今まで積み重ねてきたことのことで、困難点をどうするかというふうにしていかなければ、なんのために推進委員会をやってきたかと思います。私はその点、今、小池先生いったことに非常に疑問があります。それがひとつです。

それから、2 つ目に、どうも今までの話を聞いていると、この削減という問題と生徒数が、減少するかしらないかという問題、あまりにもストレートに考えすぎていることについて、私、非常に疑問なんです。

私たちは何をやってきたかっていったら、魅力ある学校づくりを、本当にしていかなければいけない、その点を私ずっと最初から考えていました。ですから、確かに生徒数の将来の減少増加のことは、もちろんひとつの条件ですが、そうじゃなくて、本当に諏訪で魅力ある学校づくりが再編の中で本当に必要ないのかどうか。その検討こそ、今必要じゃないかと、私はそういうふうに思います。

それから、3 つ目ですが、「上伊那はずい」と、そんな言い方に私には聞こえました。非常に心外であります。

私達は、これどういう流れで来たかっていったら、各地区1校ずつ削減。その上で本当は全体で総合学科、多部制・単位制について検討するっていう話があったんですが、実際にわれわれ全体の中で、あそこを総合学科にしては非常に難しいということで、結局各部会で、1校削減と総合学科と多部制・単位制の本当に候補があるのかどうかと、セットで考えていくことで来たわけですから、「私達が得をした」とかそういう問題では、全然ないわけです。で、仮に諏訪が、今対象になった所が、統合ではなく総合学科転換ってことだってあり得るわけでありまして。下伊那が仮に今の案じゃなくて、確か下伊那農業高校だけ総合学科に転換、これ1校削減になるわけです。いろいろな選択肢でありうる中で、こういうことが起きたということであって、えらい上伊那が得をしたとかってそういうことでは全然ないと思います。そういう言い方は非常に心外であります。

それからもうひとつ、それはうんと大事なことです。私1番心配しているのは、仮に3校削減が、ある時期までできなかったとした場合に、これもう1回県教委に確認したいんですが、もし3通で3校削減が成り立たなかったと、今のところ2校しかないですよ。2校っていかまあ3校になるっていうことは、非常に今の時点で厳しいわけですが、その場合にさっきの話は、3校削減できなかった場合は、もう上伊那を、上伊那じゃなくって3通は置いていく。つまりせっかく今動き始めている箕輪工業高校も、これはもうタッチしない、実施計画に入れないということなのか。

それから今、せっかく出た飯田工業と長姫のこの非常に苦しい選択も、これもみんなパーになっちゃうということになることを、私は非常に危惧しております。そのところを

県教委、もういっぺん確認していただきたいと思いますが、よろしくお願いします。

（池上委員長）

すみませんが、小池委員先に答えてください。

（小池委員）

まあ今、幾つか言われましたが、先ほども言いましたとおり、学科の変換とかいろんなことがあるんだけどね。1校削減という決定の経緯も確かにそうせざるを得ない状況もわかります。3ブロックは全体としても苦渋苦に2校を考えなくてはならないということもあるわけです。ただ、箕工の多部制・単位制の変換ということも、これは削減なんだという言われ方としているんだけど、それはやはり違うと思います。学校が残る訳ですよね。で、何よりも県のたたき案台で「諏訪はなし」でした。ないということは、必要ないということだと思います。そのことをやはり大事に諏訪は考えているわけです。

当然の高校の、魅力ある高校づくりについて考えたから、南、東という線も我々の中から出したわけです。私はこのように思っています。

（小坂委員）

諏訪の委員さんの気持ちはわかりますが、少なくとも私ども上伊那が、部会で考えたときに、多部制高校、箕輪工業全日制を廃して多部制・単位制になる、それで上伊那の定時制独立校も廃止やむを得ない。まあこういうことで、ただしかしその時点では、まだ諏訪・下伊那は出てなかったわけで、1校削減案が出てなかったんです。

しかし上伊那がそういう形で決めても、恐らく私は、非常に諏訪は難しいという話を聞いていましたから出てこない。あるいは下伊那も松川高校の多部制・単位制の問題もあるというような形の中で、これは上伊那は、とにかく多部制・単位制は決めたいけれども、もしほかの地区で、例えば松川高校の多部制・単位制というような議論が出てくれば、これはまた上伊那としては考えざるを得ない、そこまで私どもは議論を進めていたんです。

ですから諏訪、下伊那の出方を見て、また考え直さなきゃならない時期もあるだろうということを、そこまで議論を深めて決めたことであると、いうことでございますので、ひとつその議論を元に戻さないように、せっかくこういう形で、いい形で私はまとまったら、いうふうに思っておりますので、気持ちはわかりますけれども、まあ諏訪の皆さんよくやっていただいたなあという気持ちです。これを大事にしていきたいというふうに思っております。

（吉江高校教育課長）

今いろいろと、小林委員さんからかなりデリケートなお話を頂戴いたしました。それで私どものほうで、今1番心配しておりますのは、ある意味そのご発言なのですが、やはり平成15年から私ども、このような高校改革検討事業に着手いたしました。

それからやはり各学校それぞれ、例えば学科の改変をしたりとか、先ほど専門高校の話題もいろいろ出されておりましたが、専門高校におきまして、この学科とこの学科を今度こういう学科に、変えていきたいとか、そういうような要望があったりとか、あるいはこ

の学校をこうしていきたいというようなご要請は、これは毎年度あるお話でございます。これは単に今に限らずありまして、それからさらに申し上げますと、大きな意味での学校の改修というようなこともやっていきたいと、そういうようなことも当然議論が毎年あるところです。

それでこういうような具体的な動き、まあ15年、16年さらには17年ということで、また推進委員会をお願いして、各通学区ごとの議論までしていただくような、こういうような時期になりますと、その方向性に一定の具体的な方針が出ない限りは、なかなか通学区における、今申し上げたような要望に、お答えしづらい事態になっているということを、ご理解いただきたいと思います。

具体的に申し上げますと、例えば第3通学区において、すでに第3通学区、25校すべてがある意味では、再編整備の対象校でもあるというようなことになりますので、そういうことを考えた場合にやはり極めてある程度、やはり私日頃から申し上げているように、ある程度のスピードを持って決着をつけていただいて、お決めいただいて、それで実施計画を私どもが策定して、速やかにその実施、それはある意味で、この地区全体の高等学校のそれぞれのいろんな形での、なんていうんですか、改善といいますか、を含めてということとやって参りたいと考えている次第でございます。

(小林委員)

再質問ですが、確認ですけど、さっき課長さん、一応1月の初中旬とか、おっしゃいましたが、そこまでおろしたときにかかわらずこの3通が、3校削減がそろわなかったといった場合は、せっかく出て来た上伊那、下伊那の案もこれはもう白紙に、戻ってことなのか、そうではないのか、そこだけはっきりしてください。

(吉江高校教育課長)

基本的には、私どもそういうことでなんとか初中旬をお願いしたいと思っています。それでそうなった場合は万が一の場合には、さらに議論をしていただきたいと思います。ただ、そういうような形でした場合に、さっきのお話になってしまうんですが、第3通学区全般について私どもがやりたいと考えていること、あるいはそれぞれの学校からのご要望にお答えする時期が、どうしてもずれ込んでしまうだろうと、考えている次第でございます。

(小口委員)

ここで、諏訪地区のいろんな話になってきているわけですが、私は基本的には諏訪地域もひとつ削減はしなくちゃいけないと、まあこれは全体で決まったことでありますが、問題はやはり諏訪地域の、地域コンセンサスの問題だと思いますね。

それでほかの地域は、ほぼ6月に学校名なんて出されて、そして議論が非常に深まっているという中で方向決定である。しかし諏訪は、9月に諏訪もありきということで、高校名が出たのは11月23日でありますから、そういう意味ではほかの地区に比べますと、もう5カ月も遅くなっておりまして、到底これを地域のコンセンサスを高めて、そのいい学校づくりという案に持っていくためには、これは時間が足りない。ということであ

りまして、先ほど吉江課長からは、速やかにやりたいという話ですが、とても諏訪地域は、こういう状況ではないと私は思います。

やはりわれわれの役目は、地域と共に学校をよくしていくという、そういう地域のコンセンサス抜きにしては、やっぱり考えられない。

それから後は、小池先生も大変ご心配のように、地域に納得していただくという材料だと思いますね。この会でそういう各地域1校削減と、それから箕輪工業高校を多部制・単位制でプラス1という方向が、ある程度出ているわけですが、これに対してやはり諏訪地域が納得しないといけな。ということだと思います。

そうするとやはり各地域の、まず各地域1校減というのはバランスの問題からして、こういうふうになってきたわけですが、箕輪工業高校を多部制・単位制にする場合も、各地域のバランスの将来像といえましょうかね、それをぜひ次回までには、県に出していただきたい。そのように私は思います。

(丸茂委員)

小口委員の意見と似ている部分もありますが、私は12月1日に行われました、諏訪地区の高校PTA連合会主催の勉強会に出席して参りましたので、そのときのことをお伝えいたしたいと思います。

今回の勉強会は、私たち委員が岡谷東高校と岡谷南高校を統合するという案を提出する前から予定されていまして。諏訪地区でもやっと高校改革プランについて勉強を始めた段階ですので、まず他地域からも立ち遅れているというのは事実です。

以前に部会を設置しようという意見が出たときに、諏訪地区では、それは無理ではないかと、私は思っておりましたが、ここに来てこのような形で、PTA連合会が立ち上がってくれたということは、本当に意味のあることだと思っています。ここまで来て初めて、地域の方々からの意見を拾って来られるという段階になってきました。時間を戻すわけはありませんが、私も、諏訪地区においては、「6月24日」から先が今始まったという気がしています。ここで3校そろったから、じゃあこれから意見をまとめていきたいと思います。といわれてしまつては、諏訪地区では納得がいかない、地域の人たちの納得を得られないということは確かです。

また、岡谷東高校と岡谷南高校の両校ともが、白紙撤回を求めているという事実もご承知ください。

岡谷東高校は他地区からの生徒の流入について、その受け皿としての役割を果たしているのだということです。それから岡谷南高校は、諏訪地区においては進学校のひとつです。その進学校のひとつが削減されてしまえば、諏訪からの生徒の流出が防ぎきれなくなるのではないかという危惧を、諏訪地区の方々はおられるように感じました。

ですので、保護者の私たちの立場といたしましては、もう少し勉強させて欲しいというのが第1の希望です。私はこの言葉を使いたくないのですが、「拙速に結論を出さないで欲しい」というのが、地域の声だと思いいただいて、これからの検討をお願いしたいと思います。とにかく時間が欲しいです。諏訪地区に時間をいただきたいと思います。

(岡庭委員)

23日の話は、私も蒸し返す気は毛頭ないですし、皆さんたちにうちの熊谷委員と川島委員がいわれたことを、どうこうすると、いう気はまったくないんです。私も時間をかけてやれというのも、私も自分自身の主張です。しかしあの形で23日に皆さんたちが、私どもの委員をせかしたわけですよ。そういうことを聞いていた長姫高校の同窓会の会長が、決断をせざるを得ないという形で、本当に苦渋の選択をわれわれもしてきたわけです。今ここでまたそのことをぶり返して議論されると、われわれの議論をもう1度戻さなきゃならんということになるわけです。

特に検討委員会の中では、長姫高校のその苦渋の選択をした同窓会長から、もし1校削減っていうことが、県教委のこれから進めようとするならば、この後選択が絶対譲ることにはならないと、要するに実業高校を、飯田工業高校と飯田長姫高校の競合で1校削減するということは、絶対譲らないってことだけを、私、会長(未来検討委員会)の立場ですから、会長に責任取れと。来年責任取りますと、私は行って来たわけです。ですからそれはもうこの方向はたぶん、動かさないとやっぱり議論していただかなきゃならんだろうと。しかし時間があるというのは事実だと思います。われわれも時間がいりました。

南信州広域連合はお金をかけて、出席の皆さんに旅費も出して、そして検討していただいた37人で。そういう点では、ぜひ諏訪でもやっぱり1校削減議論をやっていただかなきゃならんだと。私は委員長に提案しますが、12月に2度も会議の計画があるようでございますけども、これ一時凍結して諏訪の皆さんで、1回ぐらい議論された後に、各通学区の報告書をまとめていただいて、それを調整するというような形で進めていただいたほうが、いいんじゃないか。これ以上話をすればやっぱり、そりゃあ俺の地域がどうの、これをということになる。これは教育の問題の議論としては、まったくやりたくない議論を、やらなくちゃならないので、そういう意味で私は提案したいと思います。

(小坂委員)

先ほど小口委員さんが、諏訪の立場から発言があったわけですが、たまたま諏訪はたたき台の削減案はなくてですね、急に出て来た。ところが上伊那のほうでは例えば、箕輪工業高校を多部制にという形の中では、もう5万人の署名があったり、いろんな議論が出て来たわけです。そうした中で、地元でもそういうことが納得して多部制・単位制を受け入れるという形になったわけです。だからそのスタンスは、諏訪の場合いきなりそういうのが出て来たという形の中で、今、丸茂さんがおっしゃったような、まだ諏訪地域としてのコンセンサスが得られていない。少なくとも下伊那、上伊那については、ある程度のコンセンサスは、十分ではなかったけれども得られたというふうに、私は理解しています。

ですから、せっかく6人の委員さん、お集まりいただいた中で、まあひとつの諏訪としてのたたき台を決めていただいたので、それはひとつ地域の中で、ひとつ十分時間をとってやっていただくことが必要だろう。また議論をしていただくということは必要だろうと思います。しかしそれを元に、この第3通学区の検討委員会の原則を、戻すようなことがあっては困るということだけは、申し上げておきたいと思います。

(池上委員長)

いままでのところで、結論を得ているのは、申し上げておりますように、全日制の各区1校減ということ、これはもう結論をいただいております、その後は各地区からご報告を頂戴すると、こういうステップで、その後の議論はまだ詰まってない、こういう立場だと思います。

ただ発言がここで言い出しておりますので、場合によれば下手な発言は自己矛盾になっちゃうという世界も、もちろんありますが、今のような話で地域のやっぱり同意を、そこそこ取っていかなくちゃいけないというの、事実だと思いますし、確かに影響する皆さんの心中も察するに、あまりあるわけでございます。そのことは今、岡庭委員やそれから心情として、小坂委員からご提案ございましたので、諏訪、上伊那、下伊那で1校というのは、ただ、今のお話の中の諏訪の地域について、じゃあどうするかというところが、もし再議論があるとおっしゃるのなら、それは少し待たせていただくということが、やぶさかではないこともございます。

(小池委員)

時間をもらってね。やっぱり地域が納得をするようなことが必要だと思います。ただ1番問題は、諏訪はたたき台になかったですね。それをなぜここで出て来たんだろう。なぜなんだ、ということがやっぱり大きな問題であると思います。

(小坂委員)

委員会で決まったからここでやっていんじゃないんですか。もう限界の委員会でそういう結論が出たわけでしょう。小池先生だってずっと出ていたんで。諏訪の6人の委員さんそれぞれ、その都度出ていた結論じゃないですか。それを元へ戻すっていうのは、それはおかしいと思いますよ。委員長さん、その辺ところしっかりいっていただきたいと思います。

(小林委員)

例えばさっき出た箕工にしても、6月に確か県教委案が出ましたよね。あれからほぼ半年ですからね。半年に近い。今さっき市長さんお話をしました。4万いくらの猛烈な反対があったが、そうして5カ月、6カ月でようやくここまで来たということを考えると、どうも1月の中旬あたりでね、諏訪の方向を出すっていうのは本当に難しいなあと思います。

箕工の場合ですら、約半年近くかかっている、ましてや今小池先生おっしゃったように、たたき台じゃなかったところから出て来たっていうと、その辺のところを今後どうするのか。私は村長さんのおっしゃるように、ここで1番忙しい12月にね、2度も3度も会をするよりは、やっぱり諏訪、まあ下伊那もそうだと思いますが、私らもそうですけど、もう少しこう地域と話し合いを、積み重ねる会を持っていったほうがいいかなと思います。ここで、全体で2度3度、どんなことが必要なのか、非常に私には見えないと思いますので、時期のことが、どうしても私には苦になります。もういっぺん考えてもらいたいと感じます。

(池上委員長)

ご意見ありがとうございます。

それで県にちょっとお伺いしたいのですが、場合によれば今の結論、小坂委員がおっしゃるように、このところは今まで決めたことは示す。それは私もそういうつもりであります。それを確認させていただいて、しかしながらこの提案の中で、まだ決まっていない事項、就中(なканずく)今のところは諏訪の問題ですが、これについてのところは、少し時間軸で必要な時間が、あるということでございますので、それは少し乗り遅れたからといって、県としてそれは違うよという話にならないふうに、ご調整をいただきたいと思いますのですが、いかがでございましょう。

(吉江高校教育課長)

今、委員長さんのご質問を頂戴しました。私どもといたしますと、先ほど来、申し上げておりますように、ちょっとかたくなだと、いわれてしまうんですが、基本的には、かねてより申し上げておりますように、いろいろとそれぞれの学校、これは89校すべてについて、懸案事項というのは多いと思っております。先ほど申し上げましたように、施設とかそういうものを含めまして多いと思っておりますので、それを早期に手を付けるというスタンスの中でお示したようなスケジュールを、基本的にはぜひお願いしたいというような形を申し上げ、とりあえずはそこでその中で、どこまでやっていただけるかというような議論は、場合によるとあるかもしれませんが、ぜひそれをお願いしたいと考えています。

例えばの話が、この委員会において、先ほどお話がありましたように、ちょっと個別に、それぞれの地区で会合を、持っていただくという方法もありますが、反面ですね、意見を聞いていただくとか、そういうようなやり方もあろうかと思っておりますので、その辺も含めましてよろしくおねがいします。

(池上委員長)

わかりました。

(岡庭委員)

やはり私どもの、旧第9通学区の私どもの検討の経過会、やっぱり1月いっぱいまでには、あるもう報告書がまとめていただくということじゃないかと、思っています。これは事実上の問題だと思いますが、通学区ごとにいろいろ意見もあるし、希望があるわけですから、それをここで通学区ごとの意見や希望を、調整しようとしても無理だと思っております。そういう点からいえば、各通学区ごとに意見を事務局と推進委員の中で、報告書という形にまとめて、1月の末にその報告書に基づいてそれを、調整するというぐらいの日程でやっていただくということが、1番いいのではないかと思います。だからそれでさっき私、冒頭で、教育委員会の課長の発言について、曖昧では困るという話をしたわけです。

(池上委員長)

まあ、いよいよ本音で厳しい所に入って参りました。それはそれで結構でございますが、ここでちょっと時間をいただきます。よろしくお願いします。

【休憩後再開】

(池上委員長)

お待たせを致しました。それでは再開をいたしたいと思います。

先ほど諏訪の状況についてご意見を拝聴する中で、大変貴重な事があると考えおりますので、諏訪の委員の皆さんの中で、ご意見をぜひ出していただきたいと思います。

(藤本委員)

先ほど諏訪の丸茂委員さん、小池委員さんもお話されていたのですが、諏訪は県のたたき台になかったことは事実ですし、この推進委員会の中で1校減というのが決まってきたわけですが、前回の諏訪での学習会に私も参加させていただきました。保護者の方、同窓会、PTAの方々が本当に母校を思っている、母校愛は大切だなあと感激しました。母校を思い、諏訪地区の教育について心配されている、あれだけの発言をされて、本当に熱心に考えていると思い、非常に感銘を受けた過日の学習会でした。

前回の推進委員会の時も私は、提案したのですが、ぜひ諏訪では、諏訪の委員の小委員会、部会、グループ会があるので、再度地域の皆さんの意見を聞く場をぜひ設定して、地域の皆さんにより、地域において、これから議論も煮詰まってくると思いますので、ぜひ地域の皆さんの意見を聞く場をもうけて、十分再度検討したい。

できましたら、先ほど岡庭委員さんがおっしゃいましたけども、12月はあと3回か、あと2回あるのですけれども、とても時間的には2回というのは無理ですが、そのうちの1回は、全推進委員の皆さんが参加されたこの推進委員会で、第3通学区の各方面の、いろいろな団体の方々からこの地域の教育をどうしたらいいか、学校をどうしたらいいのか、いろいろな意見を発表していただける場を、もちろん諏訪の方も含めて、この全体場で、そういう場の設定をしていただくと同時に、諏訪としては諏訪の小委員会の場合でも、地域の皆さんが意見を発表していただく場を、ぜひ時間をとって用意したい。

何回も言いましたが、県立高校は県教委の財産、持ち物ではないわけですし、県立高校は、県民の皆さんの持ち物で、県民の皆さんが土地を提供し、労力、財産を提供しみんなが持ち寄ったもの。つくづく同窓会の皆さんの発言を伺ってそう思ったわけです。ぜひここで地域の皆さんの意見を伺い、コンセンサスを得ていく、そのように思いましたのでよろしくお願いします。

(岡庭委員)

個人的には、十分よくわかります。それで十分議論していただくということで私が、23日の議論を受けて、実は苦渋の選択をせざるを得なかった、飯田長姫高校の同窓会長に対して、どういう説明がつくのかという事を私は聞きたい。

ここはお互いに委員が、責任をもって発言したことなので、やはりそのところはしっかり受け止めていただきたい。そのことでわれわれだけが動いたわけではないので、

人を動かしてしまったわけですから、これは十分われわれは考えていかなければ、そういう点で全体で、議論をするのではなく、諏訪は諏訪で12月、1月とふた月あるわけですから、ふた月の中でコンセンサスをとっていただいて、1月の末に推進委員会をやって、そこで、それぞれ上伊那、下伊那、諏訪の報告書を出して調整会議をやるということで、そういう方向でまとめていただきたいと、これ以上通学区の中で議論をすることについては、徒労に課すと思っているのです。

（藤本委員）

ちょっと踏み込んだ発言をしますと、やはり3通全体の議論が必要かなという気がしますが、非常に唐突な発言で申し訳ないのですが、例えば、個人的には、どうにもならなかったときは、松川高校の総合学科も何となく。非常に唐突で申し訳ないんですけども、松川高校は上伊那からかなり来ており、現実にコース制をかなりひかれている、もちろん大前提は、地域と学校、それから住民の皆さんですけれども。確か、吉江課長が総合学科でも専門性は、絶対薄まりませんといわれていますけれども、前々から私がいっていますように、生徒が系列を無視して好き勝手に動き回れば、これでは専門性が薄まることは、明らかなのですが、学校とか地域の皆さんが、系列にかなりの縛りをかけた総合学科も。この発言は本当に、唐突で申し訳ないのですが、個人的なものです。

もうひとつ、もっといわせていただければ、上伊那の場合だって、怒られてしまうかも知れませんが、箕工では昔、総合学科にという話があり、学校自身がされたか、県がかなりリードされたかわかりませんが、そういう歴史的なものもあるわけです。やはり全体的なバランスもはかりながら3通全体で議論を、という気がしたものですから。

（岡庭委員）

よくわかります。総合学科の問題は、旧9通学区も捨てたわけではない。16日にもう一度われわれ検討委員会をやることになっております。問題は、専門学科をつぶすということについて、われわれはまずいといっているのです。下伊那農業高校、子どもが農業につかないかも知れない。でも、私の役場の職員の子どもが今、下伊那農業高校に行っている。娘さんが行っている。そこで何を学んでいるかということ、要するに大根を作り、花を作る中で、生物の問題、植物の問題、人間として生きている重要な問題を、その農業課程で学習しています。

だから、職業教育というのはただ単にキャリア教育だけでなく、先ほど先生おっしゃったような人間をどうつくっていくかという時に、果たす役割が非常に大きいわけです。このことを無視して専門学科を、無くしていこうということについて、われわれ下伊那は怒っているわけです。それで専門学校をしっかりと確保すると、その上で先ほどからお話ありましたが、第3の進学校を欲しいという要望もあるわけですから。それを含めてどのように考えていくかということ、これから考えていきたいと思っています。そのようにご理解いただければありがたい。

(池上委員長)

その件はありがとうございました。場合によれば、魅力論を盛り込むということで、県に意見を要望する。活字にならないとまずいと思うのです。そういう方法があると。

(岡庭委員)

ひょっとしたら、旧第9通学区の報告書の中に、その事を入れてください。そうすると上伊那からも報告書が出せるということです。出されてきた場合に第3通学区の行く末について、どうするかという形で調整するという方法でいいんじゃないですか。

(池上委員長)

わかりました。先ほどの諏訪の問題ですが、藤本委員から途中違う発言がもつれまして、ちょっとずれてしまいました。諏訪の調整の問題ですが、そういたしますと、私のほうは、推進をしなければいけないので、いつまでならご調整がいただけるのかです。

(小池委員)

地域のコンセンサスを得ることが不可欠です。やはり地域の人々の英知を集めて考える必要があります。何が何でも白紙撤回する、保留などでは進まないわけですし、どうにもならないことはわかっています。

どこの組織が束ねるとか、そういうことも必要だけれども、できたらフリーな民意というか、PTA組織とか集まって、討論する。そしてそこへ推進委員と県教委が出るというような形がいいかなと考えます。推進委員が招集するのもおかしいし、かといって県教委が招集するのもおかしい話だし。何とか連合というのもおかしい話だし、より、フリーな意見交換会の確立、そんなふうな形を考えています。そうするとやはり、12月の終わりになりますね。この会はおしまいの方へ、行かざるを得ないかなと思っています。

(池上委員長)

12月ではどうですか。

(小池委員)

ふた月では無理でしょうね。

(岡庭委員)

南信州教育連合はふた月でやっています。ふた月で4回ありましたから、2月の末に旧通学区の報告書がまとまれば、どうなのですか県教委。

(吉江高校教育課長)

今日何回も時期の問題を問われて、なかなか答えづらい話で申し訳ないのですが、ペースとしますと、今のような岡庭委員さんのほうでご提案いただいたような形で、ご当地の確かに第9区については、形とすればほかの地域とは違った実情が、あるというような感触がございますので、全体の想定がまとまるという前提であれば、ひとつの方向性である

うかと考えています。

（小池委員）

基本的に、自然発生的な組織があるのだけれども、なかなか機能しないので、ゆくゆくは県教委は県教委でやってもらって、P連とか、同窓会とか、学校とかそういう形で会を考えていくことがよいと思います。ただ一回やったからいいというものでもないで、何回かやらなければならないでしょう。そして2カ月をかけて話をする中で、諏訪としてのコンセンサスを得ながら、魅力ある高校づくり、これからの高校教育をどうするかと、いうところまでを大事にしながら考えていくと、いうのがよろしいかと私は思っています。

（池上委員長）

ということは、1月エンドにはそういう形で、結論づけたいということですね。ほかにご意見ある方、皆さんよろしいですか。

（北原曜委員）

スケジュールはそれで私はいいと思うのですが、ちょっと気になるのが、3通全体で総合学科、先ほど藤本さんがご指摘していますが、総合学科をどう配置するかという話ですね。今までの案ですと、総合学科というのは3通でゼロになってしまうわけですが、総合学科もすごくいい点が、いっぱいありますので、具体的に総合学科を7でも8でも9でもいいですから、統合というところからめて、具体的なものを、いくつかの案というものが必要なのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

もうひとつスケジュール、1月末までというお話もあったのですが、ちょっと気になっているのが、今出ているような統合以外の、学校の魅力化といいますか、それが議論していく必要があると思うのですね。例えば、以前にありました、普通科の習熟校ですね。向学心、あるいはいろいろな魅力に、欠けているようなところもあると思うのですが、そういうことを提言していくようなことも、ここの重要な役割だと思うのです。削減、統合だけにとらわれない、その議論もしっかりやっていただきたいなと思います。

（岡庭委員）

ですからその点で私がいったのは、通学区ごとの報告書という今北原先生がおっしゃったことは、旧第8通学区の推進委員会の報告書の中に記載するとか、旧第9通学区だったら魅力ある高校づくりが、幾つか推進委員の中で考えられることは、報告書の中に出します。その中に総合学科が、出てくるかも知れない。

習熟度学科については、旧第8通学区だったらその問題についてはかきながら考えている。展開していきたい。こういう形で出されて、そこでバッティングするような問題があったらここで調整する。矛盾する線があったら調整するということで、私は旧第9通学区そのものの状況から考えて、それぞれが独立している状況から考えてみて、全体で議論してもまた、そういう方向で、それぞれの通学区でどうなのかという話の中になってくるので、それぞれの推進委員さんの考え方の中で、わが旧第9通学区はこう考えるという報告書を、その報告書をまとめるのを私は、事務局と一緒に参加してまとめていただいたのが

いいのではないかと、われわれが同じ筆で書いたものを出すと、いうことがいいのではないかと私は思っているのですが。かなり議論してきましたから。

（北原曜委員）

そのようになると、ふたを開けてポンという形で、もっと3通全体で議論していかなくてはいけないと思うのです。つまり多部制・単位制しろ、総合学科にするどこに配置したら一番効果的なのか、誰も行かないようなところに、配置しても困るわけですから、この中での全体の議論がすごく大事だと思うのですが、いかがでしょうか。

（池上委員長）

もちろん配置論については、いろいろご意見があるかと思いますが、その概念としてまとめていきますと、先ほど多部制・単位制の話もありました。総合学科についてもありましたが、語っているのは、たたき台とはいえないのか、県の案について、おおむね私はそういう側面もあると思っているのですが、そういうところにかなり異論が、あるということですと話が違いますが、それはそういう認識で、私自身もあるのですがいかがですかね。どうぞ。

（小林委員）

私は基本的に岡庭村長の意見に賛成なのですが、ただ、総合学科についてまだはっきりしていないということで、確かに1回ぐらいは北原先生おっしゃるようにやってみてもいいと思うのですが、前々から私その点強調していることは、総合学科にしても多部制・単位制にしても、かなり地域が本当に積極的に受け入れていかないと、絶対に成功しないと思います。従って、われわれが単に地理的な位置で、この辺にすればなんていうことでは絶対に駄目だということで、やはり一番細かく検討しているグループ会でさらに検討していくと、いうことが必要なと思います。その際に、これだけ確認しておきたいのですが、どうもわれわれもそうだし、地域の方々も総合学科に対して理解の仕方について、非常に偏っていないかなということなのです。

ここで確認しておきたいのは、確かに職業科の行き詰まりの転換として、総合学科を検討している点は確かにあると思う。でもそれ1本ではないと、むしろ今全体の、今の高校の在り方の中で、より新しい方向を模索することの、総合学科というのもあるという、従って簡単にいうと、普通科を総合学科に転換することも、十分あり得るということです。そういう形で、各地域で議論をしていく必要性があるかなと、それだけお願いいたします。

（池上委員長）

はい。ただ先ほどの北原曜委員の意見は、正論でございます、それは当然あり得ることと、という私も認識しております。ただ流れからすると、置く場所についてはだいたいそのよう形が、よろしいのではないかと思います。今の小林委員のお話もその通りだと思っています。

ただ委員長の私見でございますが、やはりこれからこの地域、私どもの地域ですが、本当に発展する案で、学校はどうあるべきかと、ということだと思いますから、教育委員の皆

さんと私どもの意見が、違うところがあるのではないかと思います。そういうところを顕在化させておきたいなと、実は委員長として思います。

例えば、産業はどうするかという側面を、本当に考えているのかどうかということは、今までの産学の交流等を考えてみましても、あまりそういうのがなかったのではないかと、思っていますが、そういう点も含めて、これからその魅力を、考えていかなければいけないのではないかなと思います。特に経済界だとそういうふうにいるんですけど、小口委員あたりから、前からそういう主張あるんですけども、ご意見がありましたらおっしゃってください。

（小口委員）

確かにその通りだと思います。やはり今企業でいいますと、国際化が非常に進んでいる中で、どうも日本の子どもたちの力が、ちょっと弱まっているのではないかという危惧を、大手の企業さんをはじめ、特に諏訪地方は海外に進出している企業が多いために、そういう状況が現れていまして、またそのままいきますと空洞化という話になってしまいますので、何とかここでしっかりした人材を、育てていく方向にもっていかないといけないなと強く感じております。ただ、それが高校であるのか、あるいは大学であるのかという話は多々ありまして、やはり今全員が高校へ行き、あるいは全員が大学へ行くという、こういう時代でありますので、そういう選択制を深めるという意味に対して、どこまで深められる環境にあるのかと、こういう事も非常に大きな問題であるにとらえています。

（池上委員長）

魅力論にだんだん近づいてまいりましたが、伺ってご意見ございますかね。

（藤本委員）

これからぜひ地域の皆さんのご意見を聞いて検討していくときに、やはり県会で決議もあったことですし、高校生も来ておられますので、高校生また該当校の先生方の意見もぜひ聞いていただきたい。というのは、小林委員さんが箕工の案を出された時に、私は早速箕工に電話したのですが、職員の間では全く議論されていないと。やはり、先生方も自分の保身があってはいけないのですが、一番、必死に、何とかこの学校をと考えているのは、やはり教職員集団ですし、教職員集団はやはり地域を一番良く知っております。私も進路指導をやっていたときは、会社の方が大勢来られ、こういう生徒が必要だよとか、まずは挨拶だよとか、こういう事を勉強してほしいとか、それらを知っているのは先生方なのです。ですので、先ほど地域の声を聞いてと述べましたが、専門集団である先生方の意見と高校生の意見をぜひお願いしたいと思います。

この間も丸子実業が総合学科に決まったとき、私は早速電話しましたら、丸子の先生に、職員会できちんと了承しているのです。だから、地域の声の中のひとつに、ぜひそういう専門集団の意見を聞いていただきたい。

(池上委員長)

もうひとつ私から、ずっと気にかけていることですが、定時制の問題です。議論の中では間々出てまいりましてしっかり結論を、出ていないということだと思います。例えば多部制・単位制の設置に基づかなくても、例えば上伊那の上農高校の定時制、それから下伊那の先ほどプランで出ました、これはひとつという意味ですね。というあたりについて、いろいろな意味で必要な学校であると認識しながら、このあたりについてご意見があったら、ぜひそれに対していかがでございましょうか。

(藤本委員)

上農の定時制については、委員長さんのところに過日保護者の皆さんが行かれ、意見を述べられたと、その後もう一度、2回行かれたということですが、やはり高校生声を聞いてほしい、該当校の先生の意見を聞いてほしいということで、特に定時制については、今の定時制は少人数で、近くで、しかも一人ひとり丁寧に、家庭的な雰囲気の中で、しかも学年制に基づいて生徒を育てているという側面があるわけですので、多部制・単位制を100パーセント否定するわけではないのですが、やはりそういう中で育てているという、現状の定時制の生徒、保護者の方々の意見を、ぜひ聞いていただきたいということです。安易に単位制で、今の定時制の困難な生徒たちを見捨てるようなことがあってはいけないということだけはひとつ申し上げたいと思います。

(岡庭委員)

議論のたたき台の前提条件に、多部・単位制高校、定時制を即単位制高校にする時に、今の高校生たちを決して泣かさないということが、県教委の覚悟で出たわけですから、その覚悟だけはしっかり、守っていただきたいと思っている。

だから、あまり定時制がどうのこうのという議論というのを、数字でいうと県教育委員会がどれだけ教員を配置して、どういう配慮をするのかと、通学の問題をどう配慮するのかということにかかってくるわけですから、多部・単位制高校に定時制を変えるといったとき、私はこれはちょっとおかしいのではないかと、お話ししたわけですが、県教委はそういう考え方があります。ぜひ、そのところだけはしっかり守っていただきたい。

そのことについて私どもは、旧第9通学区で定時制の子どもたちをどうするのか、あるいは養護学校を出て、高等学校へ行きたいという子どもが、昼間の定時制があればそこへ行けるという子どもの、受け皿としてどうかということについては、第9通学区の報告書では、そのことについて書いて、全体の会議にご提案したいと思っています。

(池上委員長)

この内容ご意見について県でご意見ございますか。。

(吉江高校教育課長)

まず一点としますと、先ほど伊那の市長さんからお話がございましたように、方向性で申し上げますと、第8で申しますと、今現在は3校の定時制がございます。その3校の定時制を箕輪工業の多部制・単位制の場合には、箕輪からあと1校はどこかというような提案をしたのに対して、おおむね小坂委員さんのご発言も、私どもの結果とすると案通りの内容かと思います。それから下伊那につきましては今現在2校あるのを1校に、もちろん昼間定時制というお話もちょうだいいたしました。方向性とすれば、私どもの方法であろうかと思います。あと、諏訪地区は、今現在諏訪実業高校と岡谷工業高校に現時点においては定時制が設置されておりますが、岡谷工業高校につきましては、16年から募集をすでに停止しておりますので、後1年ぐらいということになります。諏訪実業高校はこのままの前提で考えておりますから、ひとつの方向性とすれば、それぞれの地区からの今現在いただいている内容と、私どものほうが結果的には、ほぼ合致している内容と考えている次第です。

それでもう一点、先程スケジュールの関係がありましたので、事務局の立場ということで、ご検討に資していただく意味で、発言させていただきたいと思っております。できればやはり、せっかく今日諏訪地区の方からこれだけのご要望書をちょうだいいたしました。各界からご要望いただいた結果もありまして、また本日も多数これだけ傍聴の方、お見えになっておりますので、もしよろしければこの推進委員会の中で、年内に一度とりわけ7区につきましては、結果として出る形が普通の形と違っている面が、全く無いという面ではございませんので、意見を聞いていただくというか、意見を発表していただいて、推進委員の皆さんが、それをお聞きするような場面を、おつくりいただくのがひとつの手なのかなと、一点感じております。

それともう一点は、先ほど岡庭委員さんからお話ございました、各それぞれの推進委員会といいますが、各旧通学区ごとの、魅力づくりについて、最終的な場面で、霧中というお話もちょうだいいたしました。一方北原曜委員さんからお話ありましたように、そこら辺で折衷案ではないですけれども、できれば1回現行といいますが、若干大枠的な内容であっても、本委員会にお持ちよりいただいて、議論していただいた上で精度を深めて、それで最終報告の内容にするという方向でいかか。もちろんそれには、各地区ごと私ども事務局で参加せよと、いうご案内いただければ、当然出させていただきます、いろいろ打ち合わせも含めてさせていただきたいと考えております。

またそれぞれの地区で実施した場合に、ややもしますと内容が、よく分からないというご指摘を受ける場合がございますので、それぞれ持ち寄っていただいたときには、こういうような内容の魅力づくりを考えた、経過につきましてはそれぞれの委員さん側から、丁寧なご説明もお願いできればと、考えている次第でございます。

(池上委員長)

2点ございました。定時制の問題はそういう方向として確認しておきたいと思えます。それから今のスケジュール、または議論の進め方のご提案については、その点について何か委員からご意見ございますか。今のご提案について。

(小池委員)

諏訪でやる場合、いつごろですか。

県会が始まってしまうと難しいと思いますので、大体の時期を教えてほしいと思います。

(吉江高校教育課長)

地区全体の打ち合わせは別といたしまして、推進委員会で意見を聞く場面を設けていただけるとすれば、年内の今月の日程で、今現在はあと2回くらい開催を、お願いということは申し上げてきた経過がございましたが、あと1回年内に開会いたしまして、その時期をおおむね例えば、20日ごろとお決めいただくのか、もう少し後になるのかを含めて、ご決定いただいた上で、そのころにぜひご参加いただくと、いうことでいかがかと考えています。

(池上委員長)

今のご趣旨でいかがですか。12月の委員会時期、そういうお話だと思います。

(小口委員)

先ほど1月末ということで合意したのですが、実は私も考えがまとまっておらず、こういうふうになったのですが、多分岡庭委員さんのほうでは、2カ月という趣旨でしたけれども、下伊那の場合には、多分その会議の前段があったのですよね。前段といいましょうか、反対運動がずっと起きて、その中でどういうふうにまとめていくかとかこういうふうな動きだったのですね。

(岡庭委員)

前段ですか。全く今の諏訪の状況と同じことですか。

(小口委員)

ところがですね、1週間前にそういう名前が出て、それできているわけです。そちらのほうは5カ月のうち後半2カ月ができて、3カ月までにあった。まあこういう話ですのでちょっと1月末でいくということに、私非常に危惧しておりまして、多分大きな動きとしては反対運動が起こると。その中でどのようにいい学校をつくっていくかと、このようになりますが、それは2カ月でそこまでもっていけるかどうか、非常に危惧しているのですが、その辺今までの経験を、踏まえて話をおうかがいしたいのですが。

(岡庭委員)

極端な話ですね、このまま結論を出さなかったら、県教委のように下伊那農業高校と長姫高校を統合して、総合学科高校をやるという県教委の案になってしまう。県教委にその権限があるんだから、こんなことをやっていたらいけないから、自分たちの意見を通すために、そういう結論を出すということだったのですから、実際は、そんな魅力ある高校どうのこうのなんていう議論ではないですよ。

だからもともとは私がいっているように、今回はむちゃくちゃじゃないかといっている、

むちゃくちゃなことをやらざるを得なかったという、長姫高校の同窓会長の心中というのは本当に、そのことにもっと長くやるというなら、私は長姫高校の同窓会長にあやまらなくちゃならないわけです。「覆水盆に返らず」ですよ。同窓会長としていつてしまったことは。このことだけはちゃんと感じていただかないと、もし第3通学区が、小口さんおっしゃるようでしたら、私は1年でも2年でもかけて議論やるのだと。19年度にこだわるべきではないと。そういうふうに思うのですが、それが無理だと池上委員長がおっしゃるものですから、それはぜひ2カ月を目標にやっていただいてですね、無理だったらまたということ。

（池上委員長）

では、そのようなことで。全体について何かご意見ございますか。

（小林委員）

確認です。

岡庭委員さん、委員長さんのおっしゃるような方向にしたときに、各部なりの答申案をつくるときに、一番基本線はどこまで、やっておくかということを、はっきりしておいてもらわないと、それぞれがやりにくいかなと、その辺の確認をお願いしたいのです。

（池上委員長）

フォーマットや中の内容についてと、いうことでありましょうから、ちょっと県でご意見ございましたらおっしゃってください。

（吉江高校教育課長）

魅力の面につきまして、どのくらいの議論を、進めていただけられるのかということにつきましては、実はこの推進委員会の場合は非常に危惧していた点でございます。再編整備の議論が、どんな形になるというイメージもありましたので、その点ちょっと危惧しておりまして、詳細のイメージというか今の段階で、若干はもっておりますが、具体化したものは今現在、つくったものは実はございません。それぞれの地区ごとに議論していただくような方向になりましたので、私ども早速ひとつのイメージをつくらせていただきたいと思いますと考えております。

（岡庭委員）

委員長も議論をしていただいて、逆に委員長につくっていただくということで、いいのではないですか。

（池上委員長）

ではそういうことで、お任せいただきたいと思います。ほかにございますか。ちょっと時間が、はようございますが…。

(藤本委員)

ちょっといいですかね、第1回の生徒の志願状況という表をつくってきたのですけれども、いいですか。データだけですので何の意味もないのですけれども、第1回の高校生の志望調査の表が、過日県教委から出されたのですが、本当は県教委さんが表を出せばと思いますが、出されないで、私が表だけつくってきましたので、ちょっと最後に時間をいただいて、表の説明をさせていただきます。

これは、10月7日に第1回の来年度の志望調査を出した表です。まず見ていただきますと、17年度の募集定員がまず左側の表にずっとありまして、この地区は、17年度は4,920ということでした。それが18年度はどうなるかというと、二葉高校で1クラス減、岡谷南で1クラス減、岡谷工業の機械科で1クラス減ということで、7通で3つのクラスが減ということで、マイナスの120ということですので、来年度は4,800ということです。

第1回の前期よりは後期のほうが私立高校、高専、県立高校含めて、生徒がひとり1校ずつ希望を出したということですので、後期だけ選び出してそこに書いておきました。募集定数はそこに書いてあるのが、後期選抜の募集定数になっております。

二葉と岡谷南と岡工の機械科が太い字で140、140、40、20と書いてあるのは、学級減になりましたので、同じ割合で減らしてあるわけです。そしてそこに生徒さんの、かなり本音の気持ちが表れていると思うのですけれども、そんな志願状況です。黒く塗ってあるのが定員にちょっと満たない学校です。これを見ていただきますと、1回だけの希望ですし、私立高校の希望もありますし、いったん中退された方の希望もいろいろあるかと思うのですが、第7通学区が1,687、第8通学区が1,650、第9通学区が1,629ですので、中学生にひとり1校書きなさいという志望者数で見ると、まあ全部似たりよったりですが、諏訪の地区だけが、50名1クラス分少し多いかなということです。

またあと県教委から、吉江課長さんからコメントをいただければいいのですが、来年度の中学校の卒業生は、いくらかというのが右の表ですけれども、第7が1,897、第8が2,065、小坂委員さんが言われたように第8のほうが、現時点で非常に多いわけですね。そして第9が1,795ということです。これだけの中学の卒業生があるにもかかわらず、後期選抜でひとり1校、受けたい高校をあげた、後期選抜の志願者は1,687、第8が1,630、第9が1,629ということです。この中学卒業生に対して後期選抜を受けたい、県立高校を受けたいという生徒数の差をみるとなんと第7は210名の差が、第9は166名、200名ぐらいの差ですが、第8通学区というのは435名もの差があるわけです。中学の卒業生に対して、もちろんこの地区の中学の卒業生に対してですが、後期選抜の割合にこれだけの差がある。

さらにこれを割合でいいますと、第7が0.89で、0.9割の生徒が、県立高校を志望している。第8が0.79ということですのでかなり少ないですね。第9は0.91ということです。あと職業科と普通科の割合をそこに書いておきましたけれども、北原曜委員さんもおかれていましたけれども、普通科の割合が第7はちょっと多いかなと。第9は職業科の割合がちょっと多いかな。全県の普職の割合は一番下に書いておきましたけれども、他にコメントすることではないのですけれども、もしデータ的におかしなところがありましたら、吉江課長さんにご指摘いただきたいと思います。データとしてはこういうことです。

ちょっと気になったのは、第8の上伊那地区の中学卒業生に対して、県立高校の後期選抜を受ける生徒の割合が、非常に少ないかなと。もし第9なみの0.9ぐらいの生徒が、県

立高校の後期選抜を受けるということになったら、もう 200 名ぐらいの生徒が、受けることになるのかなということです。別にどうの、こうのということではないのですが、データを出しただけですので、課長さんのほうで、何か間違っていたら補足していただけたらと思います。ただデータを出しただけです。

（池上委員長）

ご意見ございますか。

（吉江高校教育課長）

すみません。いただきましたデータについてうんぬんというようなものはございません。傾向とすれば、ここでいうところの普通科と職業科のそれぞれの通学区ごとのバランス、この辺がひとつのそれぞれの通学区ごとによる、移動に現れていた面があるかと考えています。これにつきましては、私ども今回の再編整備にあわせまして、それぞれの学校の募集定員、このままでいいとは考えていませんので、今後考えていく大きな材料にさせていただきますと思います。

（池上委員長）

よろしゅうございますか。

それではですね、先ほどの議論によりまして日程調整を、また後ほど事務局とさせていただいて、それぞれのお考えを、ちょっとニュートラルなところが、ございますのでそれをつめてまたいろいろ、お願いをしたいと思っております。

事務局、ほかにございますか。

（野村主幹教育支援主事）

今委員長さんがおっしゃられたように、次回の日程につきましては、今日の議論の中で調整の必要な部分が、多分にあるかと思しますので、この場ではひかえさせていただきます、委員長さんにご相談の上、改めてご連絡申し上げたいと思います。よろしくお願いいたします。以上であります。

（池上委員長）

ありがとうございました。ほかにございますか。

それでは、本当に真剣に、慎重に、ご議論いただきましてありがとうございました。今回の委員会をこれで終了したいと思います。ありがとうございました。